ラフカディオ・ハーンと浦島伝説
―アイルランドとの繋がりと近代化との対比においてみる他界観―

伊野家　伸一

I

ラフカディオ・ハーン（ Lafcadio Hearn ）はその著書 *Out of the East* の“ The Dream of a Summer Day ”において、日本の浦島伝説に対して彼の興味のほどを示している。そこでは長崎の近代的な西洋式ホテルを嫌い、その後立ち寄った日本旅館の名が「浦島屋」であったことから、浦島伝説に想いを馳せ、自らの意識を現実と夢想の世界へ行き来させている。また絶対的な時間の経過を超越するものを感じさせるという点で、浦島伝説と相通じる面をもつようにも思われる「若返りの泉」の話にも触れている。そして竜宮の乙姫を彼が思慕してやまない母のイメージと重ね合わせているかのような場面もみられることから、ハーンの浦島伝説についての共感の深さが窺えるのである。

ハーンにとっての浦島伝説という点からは、梅本順子氏は『浦島コンプレックス―ラフカディオ・ハーンの交友と文学』において、ハーンは「自分を浦島になぞらえ、自分の半生を映し出す鏡として用い、楽園喪失の浦島を知ることにより、自分の失われた楽園を発見した」と解しながら、当作品についての検討・論証を行っている。

また西成彦氏は『耳の悦楽―ラフカディオ・ハーンと女たち』で「怪談浦島太郎」として、ハーンが浦島の物語を「千四百十六年前」として語り始めることの意味、当作品を通してハーンにみられるところの女性崇拝を含むアニミズム性、南方憧憬、そしてそれらの背後にある文明批評家としてのハーンの意識を論じている。

こうした研究・指摘等が拝察されるのであるが、本稿においては、ハーンにとっての浦島伝説と彼が意識していたのではないかと思われるアイルランドのオシーン（ Oisin or Ossian ）伝説との関連性についてと、明治期の代表的な作家たちが改作に取り組んだ浦島伝説のもつ意味合いについての検討を試みることにしたい。オシン伝説（梅本順子氏は「オシン伝説」と記しているので、同氏によるところについてはこのように記述する）をハーンが意識したことの可能性については梅本順子氏も触れているが、その根拠については必ずしも十分示されていないように思われる。西成彦氏は島崎藤村と森鴎外による「浦島」を紹介しているが、幸田露伴もまた『新浦島』という作品を著している。そこでこれらの点にも目を向けてみたいと思う。

II

それではまずハーンによる *Out of the East* の“ The Dream of a Summer Day ”にお

ける浦島の物語をみてゆくことにする。先に触れたように、ハーンは西洋式の近代的なホテルを嫌い、その反動であるかのごとく日本式に旅館に立ち寄るが、その名が「浦島屋」であった。この宿がハーンに好印象を与えたことは、その記述（1-3）からも明らかであるが、それを契機に浦島への夢想に耽ったことと旅館の存在等は丸山学氏によっても記されている（25、60-61）。またハーンの実際の旅程等について梅本順子氏も触れている（135）。そうしたなかでハーンは浦島の話を心に描いてゆく。以下はそうした“The Dream of a Summer Day”における浦島物語（4-12）の要旨である。

1416 年の昔、晴天の夏の日、漁師の子浦島は釣り船で糸を垂れるうち、ものうげな気分におちいりながら亀を釣り上げるが、千年とも万年ともいわれる寿命をもち、竜王の使いともいわれる亀であることを思い、祈りの言葉とともに放してやる。その後強い睡魔に襲われた浦島はそのまどろみのなかで、海上をすべるようにやってきた美しい乙女を目にする。その彼女は海の竜王の娘であり、亀を助けた浦島を常夏の宮殿に招き、自ら彼の妻となる旨を伝える。浦島は彼女に魅了され、二人は青く静かな海原を南へ向かい、常夏の島にある 1416 年前の雄略帝の宮殿をしのばせる竜王の御殿につく。そして竜王の娘と浦島の婚礼が行われ、そこでの至福の日々が 3 年にわたり続くことになる。

しかし両親への思慕をつのらせた浦島は、帰郷を思い立ち妻にその想いを告げる。妻は悲しみながらも、自分のもとへ戻るためには決して開けないようにとの誓いのもとに、小さな蒔絵の箱を渡し、浦島もそれを約束し故郷に向かう。自分の村についた彼は、そこが自分の知っている村とは様変わりしていることに驚く。人々も、樹木や森もかつてのものではなく、神社も場所を変えていた。浦島は一人の老人から、自分が 400 年以上前に溺死したものとされ、彼と一家の墓が古い墓地にあるのを聞かされる。その苔むし古びた墓を目にした彼はその不思議さに耐えかね、約束を破り、箱を開けてしまう。するとその箱からは白い幻のような煙が立ち上り、夏雲のように空に舞い上がると、静かな海上を南へさっと流れてゆく。妻のもとへ帰るすべを失ってしまったことを知った彼は絶叫するが、ほどなく彼の姿は老いさらばえ、生気を失い、倒れてしまう。

最後に、この話が丹後の国に伝わるものであることが述べられ、浦島の物語は終えられる。

このハーンによる浦島の物語について、西成彦氏は、その再話にあたりハーンが「1416 年前」としたことに注目し、また西洋近代文明への懐疑的視点を感じさせる当作品の書き出しと重ね合わせて、それは自然の不変性と時の流れのなかで変わりゆくものとの対比を強調しようと意図したものであると解する。浦島が帰郷するまでの 400 年は自然破壊と風景の変化をともなうものとしてハーンが示そうとした真意も、近代化を図る途上にある当時の日本において環境論的視点から歴史的時間の侵食作用を語るためのものとみる。そし

てあたかも西洋からやって来た浦島のごとく、日本を竜宮と重なる文明化されていない神秘的な常世と感じたハーンは、時間の不可逆性に逆らってまで想像力を用いた過去遡及を語ろうとすることによって、その日本の急速な西洋化に対し警告を発しようとしたのだとしている（068-076）。また、浦島が亀を逃がしてやる行為は、亀が龍神の聖獣であることから、動物神の崇りを畏れるアニミズム的な庶民信仰として説明されているとしており（076）、ハーンはチェンバレン（ Basil Hall Chamberlain ）による「ちりめん本」の「浦島」を参考にしたが、そこにみられる動物愛護・弱者救済的な教訓性をハーンは排除するとしている（077）。さらに竜宮が南方に設定されていることについても、母の祖国ギリシャで生まれ、アメリカ時代西インド諸島での日々が好ましいものであったハーンにとっては、常世の地は当然のこととして南に位置されるべきものであったと考える。一方、明治期を代表する日本の作家である島崎藤村・森鴎外らが「浦島」を題材に改作翻案を試みていることを紹介しながら、当時の南方世界は植民地支配・帝国主義の浸透によりもはや理想郷のイメージは失われつつあり、竜宮的ユートピアは性的欲望を満たす夢想郷として明治期の作家、詩人にとらえられていたことが指摘されている。こうした点から、ハーンによる当作品は、そうした日本に直面した文明批評家としてのハーンが試みた西洋世紀末芸術の総決算であると論じている（087-091）。

また梅本順子氏は、アイルランドの伝説であるオシン物語が浦島伝説と酷似していることからハーンにもその意識があったのではないかという点、約束に背いた浦島へのハーンによる非難は、彼の幼少時、母が父に離別されたことについて心の傷をもつことになったことから、男の不実に厳格であるハーンの一面を示すものであるが、亀を助けるという善行による道徳性が恋愛譚としてのストーリーに矛盾を孕ませる一因となったこと、忘却という救いが見受けられる点に浦島伝説が日本人に共感を与える要素が見いだされること、当作品の背景のように用いられている夏のイメージと青は、現世とは対極にある「常世」を想起させるものであること等が論じられている（134-154）。

それでは今度は本稿での目的とする浦島伝説との接点・対比の観点から、アイルランドのオシーン伝説をみることにする。この伝説について *Myths & Legends of the Celtic Race* （228-233）と *Celtic Myth and Legend* （223-226）に目を向けるならば、多少の差異はあるものの大筋において次のような話となっている。

騎士のオシーンが狩りをしていると、美しい金髪の娘ニアム（ Niam or Niamh ）が現れ、彼への愛を示し、二人は彼女の馬で海上を疾駆し、彼女の父の国である「常若の地」へ向かう。オシーンはその地で満ち足りた日々を過ごすが、望郷の念にかられる。ニアムはそれを承諾するけれども、与えられた馬から降りて地面に足をつけてはならないという約束をさせる。故国に戻った彼は、様子がすっかり変わっていることに驚く。そうしたなか、村人を助けようと馬上から石を持ち上げるが、落馬してしまい、地面に触れてしまう。するとオシーンはたちまち老人になってしまい、300 年の時が経っていたことを知る。そ

してその身に起こったことを聖パトリックに話すのである。

浦島とオシーン伝説について、三宅忠明氏による「浦島伝説はアイルランドに起源を発する」との視点からの論文「浦島伝説の起源と伝播－アイルランドから日本へ－」では両伝説の類似点が指摘されている。そこには

（1）不思議な登場をした女性からの求愛があり、相愛となった男女が、手を携えて異界に赴く。

（2）異界は常若の国であるが、望郷の念にかられた主人公が帰国を望むに際し、妻からある種の禁忌が課される。

（3）話の中核部分は、「異界訪問」と異界における「時間の経過」であり、主人公がこの世に戻ると、おびただしい時間が経過している。

といった共通性が抽出されている（8-10）。

同論文では、こうした民間説話の共通性がみられることについて、フィンランドを中心とするいわゆる「歴史・地理」学派の伝播説とフロイト（ Sigmund Freud ）を出発点とする「心理」学派の同時多発説を紹介しているが、モンゴロイドのアメリカ大陸への移動、ポリネシア人やヴァイキングの航海、言語の相違にもかかわらず古代より行われてきた異民族間の交流等を根拠に、民間説話の伝播が行われてきたことが主張されている。また伝播には話の臨場感が求められようし、時間がかかり過ぎれば途中で消滅する可能性もあることから、機動性の必要があるとして、世界最初の騎馬民族スキュタイに注目する。そして、スキュタイによるユーラシアでの大陸移動と、インドに興った言語が細分化されてヨーロッパに伝わり、インド・ヨーロッパ語族が形成されたことへの彼らの寄与等から、オシーン伝説がヨーロッパからインドへ伝わり、海洋伝説としての物語の特性等を鑑みるならば、東南アジアからの海路ないし海岸部を経由して渡来した可能性が高いことを説く。加えて、日本における初期の文献では、主人公が赴くのは、蓬莱、海界、常世などであるが、いずれも常世の意味であり、竜宮城が登場するのは、中世の『御伽草子』が最初であること、そしてこの頃になって、邪悪な象徴とされる西欧のドラゴンとは本質的に異なる竜神、登竜門などにみられる中国特有の想像の生物である竜がみられるようになることから、中国の伝承要素が加わってくると述べられている（10-13）。なお、ここにみられるスキュタイであるが、『ケルトと日本』の「ケルトマニアの系譜－ケルト起源神話に憑かれた人々」においても、「ガリアの起源をギリシアとゲルマンの共通起源に結びつけ、その共通起源はスキタイであるとするヨーロッパ・スキタイ起源説」（139）が紹介されている。

このようにみてくるならば、アイルランドのオシーン伝説と日本での浦島伝説は強く結びつくもののように思われる。ハーンについては、平川佑弘氏により「ハーンとイェイツ（ William Butler Yeats ）を同じ視野の中に並べてみることは納得のいくことではあるまいか」（ Murray 12 ）と示唆されているように、イェイツとともにアイルランド的背景がしばしば指摘されてきている。浦島伝説への興味・関心も彼のそうした一面を示すもの

とみることができよう。梅本順子氏は「仙境のオシン」（“Oisin in the Fairy Land”）のテーマは多くの詩人の心を捕えてきたとして、イェイツも「オシンの放浪」“The Wandering of Oisin”を創作していることを紹介している。そしてイェイツらのそれはオシンが聖パトリックとキリスト教について問答するという対話形式の叙事詩になっており、「・・・・・・青春の国は、ここではキリスト教が否定する快楽の象徴として存在することになったが、ハーンが思い浮かべたのは古い伝説の方のオシンの物語ではなかろうか」（141-142）としている。

ハーンがキリスト教に対して懐疑的であることは、“A Conservative”での主人公が一度はキリスト教に傾倒しながらも、実際の西洋社会を見聞し、その堕落を目の当たりにすることにより、日本の古きものの中に真実を見いだそうとしてゆく姿や、“The Case of O-Day”において、寄る辺ない身のお大という女に、改宗すれば助手として雇うともちかけるキリスト教宣教師が登場していることなどから推察されよう。後者については、『破られた友情―ハーンとチェンバレンの日本理解―』において、お大が位牌を捨ててしまうことについての日本の世間からの非難を通して、ハーンの祖先崇拝への関心とともに、この宣教師に対してのハーンの批判的視線が、著者平川祐弘氏により注目されているように思える（259-262）。そしてハーンのキリスト教不信の根底をなすもののひとつは、彼の母と父方の一族との間にみられた宗教的確執であろう（ Frost 26 ）。

従って梅本順子氏が指摘するように、ハーンはキリスト教普及前の古いオシーン伝説を意識していたと思われる。また三宅忠明氏は、そのアイルランドでの成立を西暦 2-5 世紀とみる（12）。ハーンについても *Glimpses of Unfamiliar Japan* の“A Pilgrimage to Enoshima”で、古ぼけた像をみながら「それは二十世紀間の時を超えて、現在よりも幸福な生活へ還ってゆくという感慨」（102）を抱いているのが見受けられる。また、*Japan: An Attempt at Interpretation* では、日本の社会をその根源に遡って検証を試み、その全体を通して過去との繋がりを示唆するなかで、祖先崇拝の念の存在が日本の本質を形成してきているとの見解が看取されるのである。よって、ハーンには古代また古代世界との繋がりを感じさせるものへの志向という面も窺われるのであって、こうした点からハーンが古代の伝説を志向したとみることは首肯できよう。

以上のような諸点、指摘等を鑑みるならば、浦島伝説はハーンのアイルランド的な背景やそうした世界を包摂させた面とともに、古代的世界への志向という面も感じさせるものといえるであろうか。

III

それでは、明治期の作家による「浦島」とそこに内包されるテーマを検討することにしたい。西成彦氏は先のように、森鴎外と島崎藤村による「浦島」を紹介しているが、川村

湊氏も『言霊と他界』において、幸田露伴もまた『新浦島』という作品を書いたことを紹介している。そして明治文学の大家がそろって浦島伝説に素材を求めたのは、明治文学さらには日本近代文学の誕生期において、〝浦島太郎〟が何らかの小さからぬ役割を果たしたのではないか（178－179）として、考察を行っている。ここでは川村湊氏の指摘・考察を参照しながら、幸田露伴による『新浦島』をみてゆくことにする。

これは一種のパロディーともとれる作品であるが、実は浦島の血統は継承されていたのであって、浦島太郎の百代目の子孫である浦島次郎がここでの主人公である。彼はひなびた漁村に両親を残し都会へ向かうが、叶わぬ恋に身をやつし、放蕩生活を送った後、帰郷する。老夫婦は彼の帰りを喜び、家宝として受け継がれてきた玉手筥と譲状を彼に渡し、翌朝、衣類等はそのままで死体は雲か霞のように消えてしまう尸解（しかい）という不思議なこの世の去り方をする。次郎は父母が神仙の境地に至っていたこと、また先祖の浦島太郎も神仙の世界である竜宮へ行き来し、その後山中に入り、修行を積み神仙となったことを知る。そこで次郎もその道をたどろうとするが、占いにより自分にはその可能性がないことがわかる。すると彼は、神仙があるなら悪魔もあるはず、人生魔に逢うもまた風流と、神仙から魔の世界へ向かうことにする。

やがて次郎は秘密修法によって大魔王を呼び出すが、大魔王は次郎の愚者ぶりを嘲笑い、神仏と魔というもその識別は「戯論空語（げろんくうご）」に過ぎず、法というも「言語名句（ごんごみょうく）」というべきもので、真実はない。だから世間の言語名句や思慮分別は捨てるように言う。そして大魔王は、次郎の体を宝剣で２分し、次郎の分身であり、侍者でもある「同須（どうしゅ）」という存在を与えるのである。

やがて一人でいる次郎のところに、都会で馴染みになった勇菊という女が姿をみせ、さかんに言い寄ってくる。それに閉口した次郎は、同須にその処置を頼む。同須は、その水に浸すと３年の間、生命を保ったまま石となる不思議な水で、勇菊を化石にしてしまう。だが次郎はそうまですることに良心の呵責を感じてしまう。かといって女に煩わされるのも困る。ジレンマに陥った彼は、同須に自分もその不思議な水に浸して欲しいと告げる。こうして浦島次郎は、同須に見守られながら「今に化石せしまゝ静に生死の外に在りとぞ」という姿になっている場面で、この物語は終わる。

川村湊氏は、この露伴の作品には、浦島太郎の物語が持つ一篇のファンタジーとしての、古代的な想像力の豊かさといったものは、ほとんどうかがうことはできないとしている。それはこの作品では、次郎の両親は神仙世界の人であるが、次郎自身は「神仙」への道を断念せざるをえない凡俗の人になってしまっているからであり、伝承の浦島太郎の物語が〝蓬莱山〟（神仙世界）への往来譚であるとすれば、露伴の作によるものは、「俗世間」という、〝神仙世界〟とは対極的な世界への往来の物語であると川村湊しはみる。そして、そこに明治の小説家としての露伴の、明治日本という「現実世界」に対する批判的な視線といったものを感じとることもできるのではなかろうとの見方を同氏はしている（194）。

そして『新浦島』の最後で、次郎が不思議な水でいわば「生死の外」という、一種の中有の世界にとどまり、そこにおいて「今」が経過しつつあるという結語が語られているのは、巧みなオチということではなく、「『神仙』の世界と、『魔』の世界との両極に引き裂かれた〝近代人〟としての浦島次郎にとって、そのような中間的な立場しか彼には許されていないということを表しているのである」（196）とみている。

ここで示されている問題、その中に含まれるであろう「両極的な二つの世界に引き裂かれ、中間的な立場でしかない〝近代人〟」を考えるために、やはり川村湊氏の『言霊と他界』の第七章「蓬莱と心宮」に目を向けてみたい。同章には北村透谷による「他界に対する観念」が紹介されている。そこでは、透谷が「『我文学の他界に対する観念の乏しきこと』を指摘し、禅学、儒学の思想が近世を通じて日本の『他界に対する観念』の発達を阻害したことを論じて、想像、理想、観念の弱いところには、『幽玄（ミステリー）を本とする想詩』、すなわち西欧文学流の〝思想文学〟は求めることができないと断じた」とされている。実界にのみ馳求する思想は、高遠なる思慕を産まないのであって、そこから〝シェークスピアのハムレット〟や〝ギヨウテのフオウスト〟のような〝幽玄〟な〝トラヂヱヂイ〟は生まれてくるはずがなかったとみるのである（161-163）。

さらに透谷は、「聖善なる天力」と「邪悪なる魔力」というような対立項の深さが、思想の深みを増し、文学も高遠で玄妙なものとなるのであり、現実の世界に対し、超越的な＜他界＞が示されることこそが、日本の近代文学に欠くべからざる要素をもたらすとする。この場合の＜他界＞とは、内面の最も奥深いところにある「想世界」のことであり、透谷はそこに「超越的、絶対的自我」を見出してゆく。ならば、透谷の言う＜他界＞なるものは、人間の心の奥の奥、心宮内のさらなる奥にある「秘宮」を意味すると同時に、そこを突き抜けていったところにある反世界としての西洋ということになりはしないかと川村湊氏はみるのである。そして同氏は、ここでハーンに触れ、透谷の「こうした＜他界＞観が、日本の中に〝蓬莱〟を見出し、そこに生と死とが混在する、曖昧な二元論の世界を見た〝西洋人〟ラフガディオ・ハーンの精神と、まったく対立的であることは言うまでもないのである」としている（167-169）。

しかし、「幸田露伴にとっては、こうした内的な想世界も絶対的なものとは思われず、心の世界を一つの独立した世界として定立させようという透谷の『近代的な自我』も迷妄＝幻にすぎないと川村湊氏はみる。そして実際、そうした明治の『超越的なもの』の世界は、霞で形づくられた蓬莱山のように、やがて現実世界の重力（自然主義＝リアリズム）の下で、霧散してゆかざるをえなかったのである」（197）とその考察を結んでいる。

Ⅳ

本稿では、ハーンの浦島伝説にみられる世界と、彼が意識していたのではないかと思わ

れるアイルランドのオシーン伝説と、浦島伝説を題材にした幸田露伴の改作による『新浦島』の検討を行ってきた。前者については、オシーン伝説のストーリーや三宅忠明氏の指摘・論証等から、そこにハーンのアイルランドに繋がる面を看取しえたかと思う。加えて、オフェイロン（ Sean O'Faolain ）著橋本槇矩訳『アイルランド』で示されている「超自然的性質」（31）、「過去と現在の間を揺れ動く」（32）といった古代アイルランド文学の特徴とされるものも、浦島伝説と“ The Dream of a Summer Day ”での語られ方に目を向けるならば、より一層その感が強くなるように思われる。また、アイルランド的世界と絡めながら「ハーンの古代への志向」という面を考える際には、『日本とケルト』の「W. B. イェイツとたそがれのケルト」において栩木伸明氏が、イェイツについて、「彼は『文学はつねに古代の情熱や信念にみなぎっていなければ、単なる事実の記録、または情熱の伴わない空想、情熱の伴わない瞑想になりさがるであろう』と主張し、・・・・・・」（121）と記していることは、先にみたハーンとイェイツの親近性と相俟って有力な材料を提供しているともいえようか。

またさらなる論点として、「幸田露伴の『新浦島』と北村透谷が行った提唱、それについての川村湊氏の指摘・考察とハーンの意識・世界が如何にとらえられるべきか」というテーマが浮かび上がってこよう。

この点については、川村湊氏が「透谷とハーンは対立的である」としていたが、同氏はまた

> 八雲にとって、〝蓬莱〟は彼が住みついた日本という現実の国の陰画であり、そこでは＜他界＞そのものが現世と切り離しがたく混在している。彼は日本の様々な幽霊たちの話を書いたが、それらの幽霊たちについて、透谷のように「畏怖の念よりも寧ろ嘲笑の念を抱きたり」ということはなかったはずだ。日本の幽霊たち、死者たち、神たちについて、八雲はそれらの＜他界＞の住人たちが、現実の世界や社会、この世の生活に大きな影響を与え、まだ〝生きている〟ことに驚嘆したのである。そして、透谷はむしろそうした卑近な＜他界＞観、生と死との曖昧なもたれかかり、生者と死者の恥知らずな支え合いを嫌悪し、激しく、厳しい二元論的対立の思想こそを、日本の近代にもとめたのである。（174-175）

としている。ハーンには *Japan: An Attempt at Interpretation* や *Kwaidan* その他においても、ここにみられるような「死者が生者の世界に密接にかかわっている」様子がみてとれる。従って、川村湊氏によるハーンと透谷の対比の仕方からは、両者は対照的な立場をとっているようにみえるが、はたしてそうであろうか。この点については、露伴の立場も参照しながら考えてみることにしたい。

露伴については先にみてきたように、明治という近代化が進展してゆく時代にあっては、

透谷のいうような現実世界の対極に位置する絶対的・超越的な他界をもって、独立した心の世界を定立してゆくことについて懐疑的な姿勢がみてとれる。それが『新浦島』において、神仙の世界はわずかに示唆されるのみで、魔の世界は神仙のそれよりもやや大きく示されているが、それとて人間の意志とのかかわりを有するものであり、主人公の浦島次郎もそうした世界との繋がりを持った人物ながら、現実、現世のしがらみにとらわれたいわば中間的な存在として描かれている。

一方ハーンは、“ The Dream of a Summer Day ”において、西洋式の近代的ホテルを、１９世紀の文明を厭い、旅館「浦島屋」にくつろぎ、浦島伝説の夢想に耽ってゆく。そして他界・死者・霊等と現実が絡み合っているかのような日本の雰囲気に驚嘆、共感しており、*Glimpses of Unfamiliar Japan* の“ Jizō ”では、境内で遊ぶ子供たちや畏怖心を感じていない参詣者らから、日本の威圧的ではない穏やかな宗教的な雰囲気を好ましく思っている様子も伝わってくる（34-35）。そこには文明、近代化に反発しながらも、透谷と同じようには、他界を現実と対極的・対立的には捉えない立場にハーンはあるとみることもでき、その意味では、ハーンは露伴の考え方にやや近いと言えなくもないであろう。ただしハーンの場合には、“ The Dream of a Summer Day ”のなかで、「言うなれば、神と約束を破った浦島を、どうして日本人は憐れみ、神として奉っているのだろう」（18-19）との疑念を示しているし、暑さのために取り決めた距離を走ることが出来ないので、約束の額より少ない車代を求める車夫に対して「最初の約束通りの車代を払いましょう。私は神が怖いのです」（27）と述べてもいる。こうしたところには、絶対的・超越的な神というものについてのハーンの意識もまた看取できるのではなかろうか。このようにみてくるとハーンの意識・感覚は微妙なものに思われてくる。即ち、西洋文明、近代化、キリスト教等に反発し、懐疑的である彼は、当時の日本に露伴の『新浦島』と一脈通じる、現実と他界が混在する世界を認めるが、露伴のように批判的ないしはシニカルにそれをとらえたのではなく、西洋とは異なる穏やかで、安寧な世界として受け止めていたと思われる。またそれと同時に、神への畏怖（それはキリスト教的なものではなく、西成彦氏の言うようにアニミズム的なものであるかもしれないが）と、川村湊氏の言葉を借りていえば「一篇のファンタジーとしての古代の想像力の豊かさ」をもった千四百十六年前の「浦島伝説」を深い関心をもって語るあたりは、「現実・現世と対極にある他界」への意識もハーンには認められよう。西成彦氏は、「千四百十六年前と語り始めるのは、現世である浦島の故郷と対照的な時間特性をもつ竜宮が自然の不変性を示すことと絡めて、時間の経過とともに変わりゆくものと、そうではない不変なものの対比を、ことさらに強調している」（070-071）とみる。

こうしたあたりに目を向けるならば、川村湊氏が指摘するように、ハーンは透谷と全く対照的な立場にあると必ずしもいえないのではなかろうか。あえていえば、透谷の提唱によるところのものを内包させながら、露伴が『新浦島』で描いた世界を肯定的にとらえて

いたともいえようか。こうしたハーンであってみれば、意識的、無意識的にせよ、当時の近代化が進む日本の本質を感じ取り、西洋社会への嫌悪・反発もあって、現世と他界の混在するところの日本に共感するとともに、そうした他界が次第に失われ、西洋文明に染まってゆく様子に不安、懸念をかきたてられた面もあったのではなかろうか。西成彦氏は「ハーンは、日本を『蓬莱』の観念によって説明するという夢に長いあいだとりつかれていた。にもかかわらず、近代化の推進によって、『蓬莱』国としての日本を見殺しにしてまで旧習を排し、急速な西洋化を推し進める明治の日本の恐るべき現状を目の当たりにしたハーンは、そうした日本の将来に対して警告を発し続けた」のであり、“ The Dream of a Summer Day ” にはそうした意図も含まれているのだとしている（075）。

最後に本稿でみてきている「近代化の進展のなかでの他界と現世・現実」というテーマとの関連において、政治学者丸山眞男著『現代政治の思想と行動』の「肉体文学から肉体政治まで」をみてみたい。これは 1949 年当時、対談形式で話が展開されるなかで、丸山眞男氏の見解が示されている。そこには、日本の場合、普通の市民的な生活環境のなかでは創作が出来にくい事情があるから、作家のなかには薬物中毒になっても、現実的な日常からの離脱を図ろうとする者も出てくるのではないかとの話が交わされ、我が国には日常・現実から乖離独立したイマジネーションの飛翔が欠落しているのではないかとの問いが示される。また創作というものは、人間精神の積極的な参与によって、現実が直接的にではなく媒介された現実としてあらわれてこそ、「作品」（フィクション）といえるのであり、フィクションはラテン語の Fictio から出た語で、本来「形作る、工夫する、転じて想像する」という意味をもつのであるから、本来「広く人間が、ある目的なりアイディアの上に何かをつくり出す」の意であることが確認される。そして、そうしたフィクション（虚構）を直接性における現実よりも高度なものとみる精神が欠落しているところでは、身分・階層に束縛された中世封建的社会を崩壊させ、新秩序による新しい社会を構築してゆくことは困難であるとする。よって現実から乖離独立したイマジネーションの飛翔によるフィクションが創造されなければ、近代社会の形成もまたなされ得ないと論じる。さらに、そうしたフィクションが創造、構築されにくいところでは、一度成立したフィクションとしての社会システムも凝固しやすく、ある閉塞的な状況に陥り、新たなフィクションとしての新システムや改革が求められる場合も、十分に機能せず、工夫・創造よりも、それが行われる以前にみられた血と土、つまり自然性への復帰でもって克服しようとするところには、ナチスにみられるようなファシズム台頭の可能性があると論を進める。

ここには「現実から乖離独立した精神が真の文学、そしてまた近代社会を形成する」とみる見解が提示されている。そして「現実から乖離独立した精神」は「他界」に繋がる要素を包摂させたものと解する余地あろう。よって、それは北村透谷の主張と相通じるものを感じさせるものでもある。そしてハーンも、他界・死者と現世・生者が混在する日本への共感とともに、現実世界と対極にある他界をも意識のなかに包摂させ、古代浦島伝説に

想いを馳せながら、ジャーナリストでもあった彼は、西洋文明に染まってゆく日本に懸念もまた感じ、警鐘を鳴らした。そうしたのは、意識下であったにせよ、丸山眞男氏の指摘する危惧に繋がるような何かを感じていたためだったかもしれない。ハーンを通して浦島伝説を考えるとき、このような「近代化とは何か」という根源的な問いかけともいえる点もまた見出すことができるのではなかろうか。

Works Cited

Frost, O. W. *Young Hearn*. Tokyo : The Hokuseido Press, 1958.

Hearn, Lafcadio. “The Case of O-Day” *A Japanese Miscellany*. Tokyo : ICG Muse, Inc., 2001.

———. “A Pilgrimage to Enoshima.” *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Tokyo : Charles E Tuttle Publishing co., Inc., 1996.

———. “Gizō” *Ibid*.

———. *Japan: An Attempt at Interpretation*. New York, Tokyo, Osaka & London : ICG Muse, Inc., 2001.

———. *Kwaidan*. Tokyo : Charles E Tuttle Publishing co., Inc., 1995.

———. “The Dream of a Summer Day.” *Out of the East*. Tokyo : Charles E Tuttle Publishing co., Inc., 1996.

Murray, Paul. Introduction. *A Fantastic Journey*. By Sukehiro Hirokawa. Sandgate : Japan Library, 1993.

Rolleston, T. W. *Myths and Legends of the Celtic Race*. London : CRW Publishing Limited, 2004.

Squire, Charles. *Celtic Myth and Legend*. N. Y. : Dover Publications, Inc., 2003.

梅本順子　『浦島コンプレックス－ラフカディオ・ハーンの交友と文学』　南雲堂，　2000.

オフェイロン，　ショーン　『アイルランド』橋本槇矩訳　岩波書店，1998.

川村湊　『言霊と他界』　講談社，2002.

幸田露伴　「新浦島」『幸田露伴集　新日本古典文学大系明治編』　岩波書店，2002.

栩木伸明　「W. B. イェイツとたそがれのケルト」鎌田東二　鶴岡真弓　編著『ケルトと日本』　角川書店，2000.

西成彦　「怪談浦島太郎」『耳の悦楽－ラフカディオ・ハーンと女たち』　紀伊国屋書店，2004.

原聖　「ケルトマニアの系譜－ケルト起源神話に憑かれた人々」　鎌田東二　鶴岡真弓　編著『ケルトと日本』　角川書店，2000.

平川祐弘　『破られた友情－ハーンとチェンバレンの日本理解－』　新潮社，1987.

丸山学　『小泉八雲新考』　講談社，1996.

丸山眞男　「肉体文学から肉体政治まで」『現代政治の思想と行動』　未来社，1977.
三宅忠明　「浦島伝説の起源と伝播－アイルランドから日本へ－」『語学センター研究紀要』　岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部，2003.